

## 「この道ひと筋」ということ

国広 哲弥

学問なり芸術なり、何かひとつのことを生涯かけて脇目も振らず追及して行くことを「この道ひと筋」と言い、世間では立派なことと考えている。この言い方には、凡人は意志が弱くて途中で挫折したり、あちこちに気を散らしたりして、なかなか「この道ひと筋」というわけにはいかないという意味合いが込められている。話を学問の分野に限るならば、ひとつの狭い専門分野の研究を生涯続けるのは偉いことであるということになる。しかし本当にそうなのかどうか、考え直してみる必要はないだろうか。

最近読んだ水上勉・広中平祐（対談）『素心・素願に生きる』（小学館ライブラリー）の中で、広中氏は次のように言っている。

「これまで大勢の数学者に会いましたが、その人たちの生き方をみて思ったことは、数学だけ徹底して研究してこられた先生というのは、哀れだなあと感じます。」

六〇歳を過ぎて集中力がなくなると、研究の質が落ちるが、それを自分で認めようとしないうちに、周囲との間にいろいろと摩擦を起こすというのである。ほかにやるべきことがなければ、能力が落ちても数学にしがみつかざるをえないというわけである。

私の大学時代の恩師、服部四郎先生はいま八〇歳台中ばで、最近では知的な活動は一切やめておられる。前から学問が趣味であると言って、ほかのことには何も興味を示してこられなかった先生は、いま何もすることがなくなってしまったそうである。最近伝え聞いたところによると、先生は「生涯学問しかしてこなかったのは大失敗であった」と述懐しておられるという。何にも興味を持つことができないことから来る心の空虚は、耐えがたいことであるに違いない。それを聞いて、「この

道ひと筋」というのは考えものだと思い始めたわけである。今まで学問以外のことにちょいちょい気を散らす生涯を送ってきた私は、学問を十分に深めることはできなかったけれども、あながち駄目な生涯であったとは言えないのではないかと思い始めているわけである。

学問研究の分野でも似たことが言えるのではないだろうか。あるひとつの狭い専門分野だけを守ることが果していいことと言えるかどうか。一見そこから深い研究が生れて来るように思えるが、盲目的な暴走に終ることはないだろうか。むしろ学問の他の分野ばかりか、学問とは一見何の関係もないことに気を散らすことによって、思いがけない独創的な着想を得ることがあるのではないだろうか。凡人がそんな真似をすると、アブハチ取らずに終るという心配をする人もあり得よう。人さまざまであるから、私は自分の考えを人さまに奨めるつもりはないが、自分ではこれからに備えて、いままで通りに遊びにも気を散らしながら研究も進めることにしたいと考えている。そう言えば大前研一氏の遊びを奨める本『遊び心』というのがあった。

「この道ひと筋」的な考え方は、ある大学の昇任人事の審査基準にも見える。つまり研究論文は同一分野のものでなければならないというのである。私の考え方からすると、これは視野を狭めることを求めているように読める。大切なのは個々の論文の質であり、諸論文が同一の分野に集中しているか否かということではない。同一分野に集中しているということは、裏から見るとその分野のものしか書けないというマイナスの意味を持っていることもあり得よう。基準の適用に当たっては、そこらの事情を考えて、柔軟に処すのがよいのではなかろうか。